

# 米POD参加報告

## 共通テーマは「IT活用授業」

「ファカルティ・ディベロップメント(FD)」に関する世界最大規模のイベント、PODネットワーク年次大会が、十月二十四日～二十八日、アメリカ合衆国ワシントン州シアトル市のシェラトン・シアトルホテルで開催された。

今年も、例年にも増して世界各国から八〇〇名以上が、日本からも約一〇名が参加した。帝京大学高等教育開発センターからは、筆者と井上史子准教授が参加した。今年



ポートランド州立大ダネル・ステューブンス教授と(筆者左)

の共通テーマは、二十一世紀の高等教育実践を反映して、「Pencils & Pixels」と題された。これは、従来の学習者が鉛筆(ペンシル)とノートで学習する授業と、最新のIT機器(ピクセル)を活用して学習する授業を言葉巧みに、「P」で「心(心合せ)」をしたもの。約四日間行われたワークショップ、セミナー、講義もこのテーマに関連するものであった。とくに、授業や学習形態に関するパラダイム転換に関する発表が多かった。たとえば、

「Blended Learning」や「Hybrid Learning」という言葉が表すように、学習形態も、伝統的な教室内授業と教室外のオンライン学習をブレンドあるいはハイブリットするといったものがあった。講義形式に關しても、「Flipping the Classroom」と題する発表からもわかるように、従来の教室内授業を教室外学習に「方向転換」させ、事前に準備学習させることで、教室内の能動的学習を促すものである。

中教審答申が八月二十

八日に出されたが、そこで注目されたのが「学修時間の確保」である。さらに、日本の大学生を比較して、日本の大学生の学修時間の少なさが強調された。答申は、「学修時間を増やしなさい」と注意を喚起するだけでは効果はないとして、教員の授業に対する工夫や改善

を促している。学生が学習をしないのは、日米の大学でも同じである。アメリカの学生が多く学習しているわけではない。アメリカの大学では、PODの発表でも見られるように、授業に対する工夫・改善が不断に行われている実態も見逃せない。すなわち、講義内容を予め教室外で準備学習させることで、教室内ではグループ討論や議論が活性化でき、「深い学び」に繋がるという考えである。これまでの講義中心のパラダイムを「転換」することは容易なこ

とではない。教員や学生の学びに対する意識改革が求められる。中教審答申は、「学習」から「学修」へのパラダイム転換を求めているが、「学修」への転換には、教員の授業に対する工夫・改善が不可欠である。従来のように、教員が教壇で既存の知識を伝達するだけでは不十分である。何よ「SOA」「Student Engagement」を促し、学生の主体的学習を促す授業実践に心がける必要がある。(文責：帝京大学高等教育開発センター 土持ケリー法一教授)